

マタイ 6:16-23 「澄んだ目で歩む」

「断食をするときには、あなたがたは偽善者のように沈んだ顔つきをしてはならない。偽善者は、断食しているのを人に見てもらおうと、顔を見苦しくする。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。あなたは、断食するとき、頭に油をつけ、顔を洗いなさい。それは、あなたの断食が人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。

あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。

体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁ってあれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう」

何を目当てとして生きるか。それによって、わたしたちの生き方が変わってまいります。何を目当てとして生きるか。それによって、わたしたちの存在そのものが変わってまいります。何を目当てとして生きるか。それは、わたしたちが自分の目で何を見て生きるか、ということでもあります。

わたしたちは、自分の目で、何を見ているでございましょうか。あるいは、わたしたちは、自分の目で、何を見たいと願っているでございましょうか。

わたしたちに語りかけられております今日の聖書の箇所において、主イエスキリストは、お金を見て生きる人のことを取り上げておられます。

お金を目当てとして生きる。自分の目で見ているのは、いつもお金である。そうして、もっとたくさんのお金を、自分の目で見たいと願っている。そういう生き方をしている人の姿であります。

いったいお金そのもの、というのは、わたしたちのために役に立つわけではありません。お金そのものは、銅や白銀で出来た薄い円盤であり、あるいは、すかしの入った紙切れであります。どうもしょうのないものであります。

しかし、お金をいろいろな商品と交換することができる。自分にとって価値あ

と思えるさまざまな商品と取り替えることができる。お金があれば、どれでも、どんなものでも、自分の好きな商品と交換することができるのです。この、商品との交換、ということにおいて、お金はわたしたちの役に立つのです。

じっと、ひたすらお金を見つめて生きる、ということは、そのお金の先に広がっている、あの商品、この商品、あのすばらしい商品、このすばらしい商品を見つめて生きる、ということでもあります。それはそれは、何時間見つめても、飽きないわけでありましょう。

あの商品があれば、わたしはもっと豊かに生きることができる。この商品があれば、わたしはもっと快適に生きることができる。あの商品があれば、わたしはもっと楽しく生きることができる。この商品があれば、わたしはもっと幸せに生きることができる。

どの商品も、どの商品も、それは結局のところ、自分、わたくし、この自分自身、このわたくし自身、というものをふくらませてくれるものである、ということなのです。

じっと、ひたすらお金を見つめて生きる。そのお金の先に広がっている、あの商品、この商品を見つめて生きる。それはつまり、それらの商品がふくらませてくれるところの、自分自身、わたくし自身、というものをひたすら見つめて生きる、ということでもあります。

さて、これこそが、実は地獄なのであります。地獄は、自己の苦しみ、つまり、自己の苦、「自己苦」だ、ということができるのではないかと思います。自分がいて、自分がひたすら自分だけをみつめている世界。自分がいて、自分はただ、いかに自分をふくらませるか、ということだけを考えている世界。自己で完全に完結してしまっている世界であります。

そうして、自分がどれほどふくらんだとしても、そこから生まれるのは絶望でしかない、というのが、この地獄、あるいは、自己苦の悲劇であります。

いったい、自分が、ひたすら自分を見つめ続けることは、自分についての心配、自分についての思い煩いだけを生み出すのです。「虫が食ったら、どうしよう。さびが付いたら、どうしよう。泥棒が入ったら、どうしよう」という心配であります。

イギリスのスチュアート・ドネリーさんは17才のときに3億円の宝くじにあたりましたが、お金をめぐる心労におしつぶされ、29才の若さで死んでしまいました。家で孤独死しているのを、先週の水曜にスコットランドの警察が発見したそうです。

主イエスキリストは、「富は、天に積みなさい」とおっしゃいました。これは、自分だけを見つめて生きるのはやめなさい。あの商品、この商品を見つめて生きるのはやめなさい。お金を見つめて生きるのはやめなさい、という呼びかけであります。

イエスさまはおっしゃいました。「あなたの富のあるところに、あなたの心もある」

わたしたちは、生きる上で、いったい何に最高の価値、最上の価値を置いているのでしょうか。わたしたちが最高の価値を置くもの。そこに、わたしたちの心もある、とイエスさまはおっしゃいます。

わたしたちが、主イエスキリストに最高の価値を置くならば、わたしたちの心は、いつも、たえず、主イエスキリストと共にあるようになります。わたしたちの心が、いつも、たえず、主イエスキリストと共にあること。これが天国であります。

わたしたちが、自分自身に最高の価値を置くならば、わたしたちの心は、いつも、たえず、自分自身の中に閉じ込められているようになります。わたしたちの心が、いつも、たえず、ただ自分自身という殻の中に閉じ込められていること。そうして、この閉じ込められた状態が永遠に続くこと。これが地獄であります。

さて、わたしたちがよほど気をつけなければならないのは、この、自分だけを見つめて生きるということが、何もお金だけ、何も商品だけに限らない、ということでもあります。この、自分だけを見つめて生きるということが、宗教においても起こり得る、信仰においても起こり得る、ということ、わたしたちはよほど気をつけなければなりません。

わたしたちに語りかけられております今日の聖書の箇所において、主イエスキ

リストは、断食をして生きる人のことを取り上げておられます。

ここで主イエスは、当時のユダヤ教の習慣に従って毎週水曜日と金曜日に必ず断食する熱心な信者のすがたを取り上げておられます。

この信者というのが、断食するときには、頭をわざとぼさぼさにし、顔や服装をわざと見苦しくして、自分が断食していることを周囲の人に見てもらおう、わかてもらおう、ほめてもらおう、とする人であります。

小さな子どもが、ほめてもらおうとしてお手伝いをするのですが、思ったように、願ったように、ほめてもらえないと、とたんに不機嫌になって怒り出す、ということがございます。

自分が自分だけを見つめて生きている、ということが、宗教生活において、信仰生活において、起こり得るということを、主イエスキリストは指摘なさっておられるのです。

わたくしも、まだ駆け出しの伝道者でありましたときは、自分が奉仕いたしまして、その奉仕に対して、どなたからもお礼の言葉ひとつないときは、ずいぶん面白くない思いをいたしました。「いたしました」と過去形で言うておりますけれど、正直言いますと、いまでもときどき、そんな面白くない思いにかられそうになる瞬間が、まったくないわけではありません。

そういうときは、わたしたちはよほど用心して、その面白くないと思う心持ちから、飛び出して逃げなければなりません。これは、ひそかに地獄に通じている道であるからであります。

いったい、この宗教生活というのは、信仰生活というのは、わたしたちが主イエスキリストのみを見つめて、主イエスキリストのみをたたえて、主イエスキリストのみに栄光を帰して、そのようにして、自分を忘れて生きる道であるはずであります。

ところが、巧妙に忍び込んでくる誘惑というのは、いつでも、どこでも、この宗教生活、信仰生活においても、わたしたちが、自分だけを見つめて生きるようにと、仕向けて来るのであります。

主イエスキリストは、断食を例に取り上げておられますけれども、断食は神のためにすることであるはずであります。それがいつのまにか、自分自身というものをふくらませるための断食。みんなから見てもらって、わかってもらって、ほめてもらって、それによって自分自身を限りなくふくらませるための断食という、本来の断食とは似ても似つかぬものに、すり変ってしまっているのがあります。

自分をふくらませるための宗教生活。自分をふくらませるための信仰生活。これは、お金によって自分をふくらませるための世俗の生活。商品によって自分をふくらませるための世俗の生活と、本質においては、何ら変るところがありません。このような、自分をふくらませるための宗教生活を、主イエスキリストは「パリサイ人のパン種」と呼んで、警戒するよう注意なさいました。

わたしたちは、ただ神を目当てとして、生きるべきであります。わたしたちは、ただ、神を見つめて生きるべきであります。わたしたちは、この目で、神を見つめていこうとするべきであります。主イエスはおっしゃいました。「隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくようにしなさい」

だれひとり見ていないとしても、だれも気付いてくれないとしても、だれもわかってくれないとしても、だれもほめてくれないとしても、いいじゃないか。わたしは、隠れたところからちゃんと見ていてくださる神様のために、生きよう。この神様が、ちゃんとわたしを見てわかっていてくださる。このことをもって、わたしは満足しよう。わたしは、何をするにも、ただ神様に見ていただくためにだけ、するようにしよう。

これが、神を目当てとして生きる。これが、神を見て生きる、ということでもあります。

神を目当てとし、神を見て生きようとする人の目は、澄んでおります。

反対に、お金を見つめて、商品を見つめて、宗教を見つめて、それらを通してただ自分だけを見つめて生きようとする人の目は、主イエスご自身のお言葉によれば、濁っております。

主イエスはおっしゃいました。「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身は明るい、濁っていれば、全身が暗い」

わたしたちが、ただ自分だけを見つめて生きようとするならば、そこからは、心配が、不安が、恐れが、悩みが、尽きることはありません。自分が自分だけを見つめて歩むならば、わたしたちは永遠の絶望へと導かれるであります。

わたしたちが、ただ主イエスキリストを見つめて生きようとするならば、そこからは、満足が、平安が、喜びが、尽きることはありません。なぜなら、神こそが、あらゆる満足、あらゆる平安、あらゆる喜びの、尽きることのない源でいらっしゃるからです。わたしたちが、キリストを見つめて歩むならば、わたしたちは永遠のよろこびへと導かれるであります。

何を目当てとして生きるか。それによって、わたしたちの生き方が変わってまいります。何を目当てとして生きるか。それによって、わたしたちの存在そのものが変わってまいります。何を目当てとして生きるか。それは、わたしたちが自分の目で何を見て生きるか、ということでもあります。

わたしたちは、わたしたちの目で、ひたすら主イエスキリストを見つめて、生きていきたいものであります。ひたすら主イエスキリスト見つめ、自分のことは忘れて、進んで行きたいものであります。

結びとして、フィリピの信徒への手紙第3章13節から14節。そして、ヘブライ人への手紙第12章1節と2節をお読みいたします。

「兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞与を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」

「すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら」

祈りのコーラスとして、コーラスの32番「めをあげて見よ」を歌いましょう。

めをあげて見よ イエスキミのみかお
世につける思いきえ めぐみ満ちあふれる

祈り

天の父なる神様。わたしたちは、あたらしい一年の歩みを始めておりますけれども、この一年間の歩みを、ひたすら主イエスキリストを目当てとして歩むことが出来ますように、わたしたちをお導きください。

わたしたちの目の中には、さまざまなものが入り込んでまいります。わたしたちは、お金を見て生きよういたします。わたしたちは、商品を見て生きよういたします。わたしたちは、宗教を見て生きよういたします。それらによって結局のところ、わたしたちは、自分自身だけを見つめて生きよういたします。

どうかこのような、永遠の絶望であるところの地獄に通じる道から、わたしたちをお救いくださいますように。

わたしたちは、今年一年間、いつでも、どこでも、たえず、主イエスキリストをひたすらみつめて生きることが出来ますように、どうかお導きください。

だれも見てくれない、だれもほめてくれない、だれもわかってくれない、と思うとき、主イエスキリスト様が見ていてくださる。父なる神様がおよろこびくださる、ということを思って、満足することが出来ますように。

自分の家族に仕えるとき、主イエスキリスト様を見ることが出来ますように。

となりびとに仕えるとき、主イエスキリスト様を見ることが出来ますように。

小さき人々に仕えるとき、主イエスキリスト様を見ることが出来ますように。

そのようにして与えられる、ほんとうの満足、ほんとうの平安、ほんとうの喜びを味わうことのできる今年一年とならせてください。

主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン